

研究発表もうしこみフォーム

氏名: 齊光

氏名のローマ字表記: Ulaanbars

所属: 復旦大学歴史地理研究センター

専門分野: 大清帝国史

発表のタイトル: 19世紀後半のアラシャン=ホシュート旗兵の武器について

発表要旨 (600字~800字程度) :

本報告は、モンゴル文の史料を利用して、19世紀後半のアラシャン=ホシュート旗兵が使っていた武器の種類・由来とその管理方式を解明し、そしてこれらの武器が導入された歴史的背景を探求しようと試みるものである。

一般の認識において、18・19世紀のモンゴルの兵士たちには、弓・槍・刀が主要な武器だと考えてきた。しかし、近年公開した満洲文・モンゴル文档案史料から見ると、決してそうでもなかったようである。ロシア製のフリントロック式のマスケット銃を導入した18世紀前期のジュンガル兵は無論、大清帝国の主要な戦闘部隊として活躍してきた八旗チャハル兵や外藩モンゴルのジャサク兵たちにも、大量な北京製マッチロック式マスケット銃が配備されていたのである。

一方、世界史の視点から見ると、18から20世紀にかけて、ヨーロッパ・アメリカ諸国兵の武器や軍隊の組織方式・戦闘隊形・陣地戦術は、海外利権を争う頻繁な戦争の中で、著しく変化していた。特にナポليون戦争期を経て、西洋諸国の武器の新陳代謝は、日新な状態であったことがすでに知られている。共和思想の伝播・三権分立政体の樹立・植民地支配の拡大と同時に、兵士たちが使った武器も人類の歴史を強く後押しし、世界史における近代化を成し遂げたといえよう。

では、少なくとも忠親王センゲ=リンチンの時代まで、大清帝国の主力戦闘部隊の一員であった外藩モンゴル兵の武器は、19世紀後半にきてから、いったいどうなっていたのだろうか。相変わらず馬上で弓や槍を振舞っていたのだろうか。騎馬軍団の突入式あるいは両翼式戦闘方法は、銃砲一斎射撃の前で、徐々に威力を発揮できなくなった19世紀中期の戦術変化を前提に、モンゴル兵はどのような戦闘方式をとることになり、それにまたどのような武器を使用することになったのであろうか。その真実を解明したい。